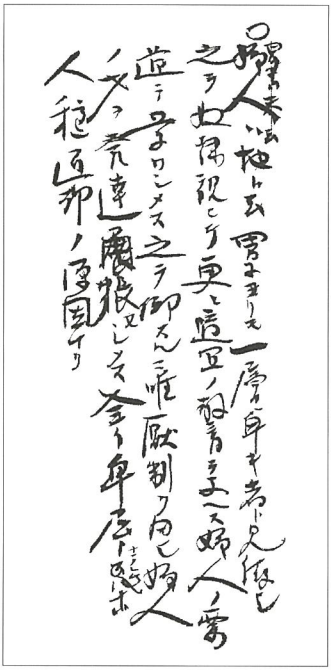

「男子ハ天ト云、婦人ハ地ト云、男子ヨリモ一層卑キ者ト見做シ之ヲ奴隷視シテ更ニ適宜ノ教育ヲ与ヘス、婦人ノ要道ヲ学ワシメス、之ヲ御スルニ唯圧制ヲ用ヒ、婦人ノ才ヲ発達展張セシメス、全ク卑屈トナラシムル等人種退却ノ源因ナリ」

新島　襄の言葉

坂本　清音（女子大学特任教授）

新島の演説「人種改良論」の一節。一八八〇（明治十三）年十一月二十日、熊本安巳橋通伊藤八自宅で、聴衆七十名余を前にして行ったもの。この年新島は十月十一日に離京、岡山教会設立式に出席した後、今治・博多・熊本と卒業生・在校生の実家を訪ねながら二カ月近く説教並びに演説旅行をした。

新島はアメリカ滞在中に、キリスト教信仰を持った、思慮深く自立した女性と身近なところで接する機会に恵まれたので、帰国後、いわゆる儒教倫理の下で蔑視され卑屈な生き方を強いられている日本女性の姿は容認しがたいものであった。

この引用個所の直前で、新島は「教育中最モ人種退歩ニ関セル大事件ハ婦女ニ教育ヲ加ヘサル事也」と記述しているが、この一文と、逝去の一カ月前に矯風会書記佐々城豊寿に遺した言葉、「女学校卒業生が長年父母に苦労をかけ大金を費やして漸々卒業したにもかかわらず、一旦他家に嫁した後は殆ど学ばざる女同様に、夫の圧制を受け…折角学びたる技量を顕す道なきことは…気の毒のみならず文明の妨げなるものなり」を繋げると、彼が帰国以来、女性を教育し社会のために役立つ人材に育て上げることを、日本国民の改良、文明の開化に必須のものと考えていたことが分かる。